

残留孤児の恩返し 学校完成



義援金で建った小学校の子どもと話す
中国残留日本人孤児ら＝18日、中国四川省眉山市始建鎮太山村、大久保写す

【眉山（中国四川省）＝大久保真紀】日本全国で暮らす中国残留日本人孤児らが四川大地震の際に寄せた義援金をもとに、中国・四川省に小学校が新たに建てられ、孤児ら約80人が18日に現地であった落成・寄贈式に出席した。今度は自分たちが恩返しする番――。中国の人々に育まれた孤児たちの思いを、四川の貧しい子どもたちが笑顔で受け止めた。

四川省の省都・成都から南へ約120キロ、眉山市仁寿县の田畑が広がる山あいの農村に、4月末、校舎が完成した。建設資金には、2年前の大地震を受けて、孤児らが寄せ合った約1700万円が充てられた。「中日友好太山村小学校」と名付けられ、今月中旬から授業が始まった。孤児たちは当初、地震で倒壊した小学校の再建を望んだが、文房具も

四川へ義援金 子どもに笑顔

買えない貧しい子の多いこの地域で、小学校新設を打診され、承諾した。18日であった式に日本から駆けつけた孤児らを在校生128人全員が拍手で迎えた。孤児らはコンピュータ16台を寄贈したほか、子どもたち一人ひとりに通学かばんと鉛筆や定規など文房具が入った筆箱をプレゼント。「頑張って勉強し、役に立つ人になってください」と子どもたちを励ました。

生徒会長を務める6年の李敏さん(12)は「とても感謝している。学校はきれいに使っていきたい。筆箱がとっても気に入った」とほかにうなづいた。福岡市から訪中した木村琴江さん(67)は「今日は子どもたちと会えて、言葉にならないくらいうれしい」と目を赤くした。幼いころは貧しく、ぬかと刻んだ野菜をまかせて食べるのがやっと。小学校にしか行けなかった。2年前には自ら寄付したばかりでなく、仲間の孤児と街頭募金をした。「私たちは勉強したくても十分に勉強できなかった。少しでも援助できればうれしい」。孤児たちは今後も同校を支援していくつもりだ。訪中団副代表、東京都八王子市の河村忠志さん(65)は「日本での生活は決して裕福ではないが、2008年春から新支援策が実施されて精神的にも経済的にも少しゆとりができた。子どもたちには日中友好のために頑張ってほしい」と話した。

2010.5.19
朝日(夕)